

教化と自己成型

オラウーダ・エクイアーノの〈英国化〉

久野 陽一

1. 映画『アメイジング・グレイス』とユッサー・ンドゥール

2007年は、奴隷制度について考える場合に記念の年であった。1807年にイギリスの国会で奴隷貿易廃止法案が可決されて、この年の3月でちょうど200年になるからである。イギリス国内ではそれにタイミングを合わせて『アメイジング・グレイス』（マイケル・アプテッド監督）という映画が公開された。2006年制作のこの映画は、ウィリアム・ウィルバフォースを主人公にし、彼の国会議員としての10年以上にわたる尽力の結果、奴隷貿易廃止法案が可決されるまでを描いた伝記映画である。タイトルは同名の賛美歌からとられている。この歌の歌詞を書いたジョン・ニュートン、元奴隷船の船長でありながら後に改心して牧師になった人物は、ウィルバフォースの縁者でもあった。この映画には、彼の他にもトマス・クラークソンなど、重要なアボリショニストに混じって、元黒人奴隷オラウーダ・エクイアーノが登場する。¹

そこで、興味をひかれるのは、このエクイアーノの役を、現代のアフリカを代表するスーパースターの一人で、セネガルのダカールを拠点とする歌手、ユッサー・ンドゥールが演じていることである。² 映画初出演の彼は、この映画のなかで役柄を与えられた「ただ一人の黒人俳優」である。彼は、映画の公開に合わせて『ガーディアン』に掲載されたインタビュー記事で、エクイアーノを演じることについて語っている。おそらくユッサーを目当てにこの映画を観た人は、（記事の筆書スティーヴン・モスも言

うように) 彼が映画のなかで「かなり地味」なので「失望する」かも知れない。実際に芝居らしい芝居で印象に残るのは、シャツの胸をはだけて「動産としての奴隷の刻印」をウィルバフォースに見せる場面くらいである。不慣れな英語での演技によることもあるのだろうが、それでもユッサーはインタビューによると「映画のなかで唯一の黒人なので、黒人による奴隷解放運動の全体を代表しなければならない」というところに意義を見込んでいる。彼は自分自身を「アフリカから西洋世界へメッセージを運ぶ」、「二つの文化をつなぐハイフン」と見なしていて、この点で彼は「エクイアーノの二重のアイデンティティ感覚」を共有しているのである。それゆえに、エクイアーノを演じながら彼は「黒人を、アフリカの人々を代表していると感じていた」と語っている (Moss 参照)。

記事の最後でもふれられていたユッサー・ンドゥールのニュー・アルバムは、予定通り 2007 年の秋にワーナー系のノンサッチ・レーベルから発売された。この『Rokku Mi Rokka (Give and Take)』というアルバムは、なかなかの傑作だ。ユッサーは、セネガル国内向けと国外向けでアルバムを区別しているが、これは世界市場向けの作品で、日本を含む世界各国で流通している。もともと、彼の音楽のスタイルは、ンバラ (mbalax) と呼ばれるダンス・ミュージック、すなわち、ウォロフ語で歌われ、タマ (tama) など、ウォロフの (トーキング・ドラムと総称される) 伝統楽器と西洋の楽器を混合して演奏される、疾走感のあるハイブリッドな音楽である。が、今度のアルバムでは、射程をセネガルだけでなくモーリタニアやマリにまで広げて、特に北部フラニ族の音楽を取り入れていることに特徴があり、最近「砂漠のブルーズ」と呼ばれて人気のあるサハラ周辺の音楽に近い感覚も聞き取れる。それに応じて、マリやギニアのマンデ族の人々のあいだではンゴニ (ngoni) と呼ばれ、西アフリカ一帯で使われる、小さな丸形のボディを持つリュートが大きくフィーチャーされている。アルバム・タイトルも、ウォロフ語ではなく、フラニ語とのことである。ま

た、最後のトラック “Wake Up (It's Africa Calling)” で彼は、フラニ族にルーツを持つネナ・チェリーと英語でデュエットしている (Kane 参照)。世界市場向けの作品におけるこうした試みは、ユッスー一流の音楽的越境のやり方が強く感じられるもので、「アフリカを代表すること」の政治性を示すひとつの例である。同様のことは、ナイジェリアのフェラ・クティ、ジンバブエのトマス・マプフーモなどにも言えるだろう。

このような現代のユッスー・ンドゥールにも見られるような「アフリカを代表すること」の政治性は、オラウーダ・エクイアーノの生きた 18 世紀も同じだった。ユッスーが音楽その他の活動を現代の大衆的なメディアに乗せることによっておこなっているのと同じことを、エクイアーノは自分の生涯を 18 世紀の最も大衆的なメディアであった書物として出版することによっておこなった。そこでここでは、エクイアーノの場合、「アフリカから西洋世界へメッセージを運ぶ」ことがどのような地点から発信することによって可能になったのか、また、どのような自己成型によってそれを実現したのか、問題にしてみたい。

2. 「アフリカの息子たち」 - エクイアーノのレトリカル・ポジション

もともとアフリカの人々は、自分たちを「アフリカ人」とは考えなかった。彼らは言語も宗教も政治形態も異なった個別の部族からなっていて、それぞれ、たとえばヨルバ族、イボ族、アシャンティ族などと自分たちのことを考えており、こうしたエスニック・グループが彼らのアイデンティティだった。彼らが自分たちを「アフリカ人」と認識するようになったのは、18 世紀の後半になって、奴隷としてアフリカから切り離された者たちの一部が、自分たちを「アフリカの息子たち」(Sons of Africa) と呼ぶようになって以降のことである。要するに、総体としての〈アフリカ〉というものは、18 世紀の奴隷貿易廃止運動が起こって初めて概念形成された、あるいは「発明」されたのだ (Carretta 20; Parker and Rathbone 4-10

も参照)。

他ならぬオラウダ・エクイアーノも、何人かの仲間の黒人たちとともに「アフリカの息子」を名乗った。たとえば、1787年12月15日付けで代表的な奴隷貿易廃止論者グランヴィル・シャープに宛てられた手紙において、「グスタヴス・ヴァッサ」としてのエクイアーノやオットーバ・クゴアーノを含む12人の人物が名前を連ねる「アフリカの息子たち」は、自らを「ひどく虐待されたアフリカの民とその子孫」と同定している(“The Address of Thanks of the Sons of Africa to the Honourable Granville Sharp, Esq.” *The Interesting Narrative* 328)。ここには、アフリカで生まれた者だけでなく、一度もアフリカの地を踏んだことがないその子孫にも「アフリカ人」のアイデンティティを与える、「ディアスポラ」の自己同定のあり方が見られる (Carretta 257)。そして、「人種の団結と自己認識、アフリカ人のためのアフリカ、人種差別に対する抵抗、白人の優位と支配からの解放」(Fryer 272) など、後年のパン＝アフリカニズムの先駆的立場に、自伝を出版したときのエクイアーノの政治的なレトリカル・ポジションがあったと言える。彼は、このような政治的な地点から発話しているのだ。

この元黒人奴隷によって書かれた自伝『興味深い物語』(*The Interesting Narrative of the Life of Olaudah Equiano, or Gustavus Vassa, the African*) は、黒人作家によって英語で書かれた最初のまとまった著作のひとつで、著者の没年までに9版を重ねたベストセラーである。1766年にエクイアーノはそれまでの労働で稼いだ金で自由の身分を買う。奴隷の身分から解放されたとき、自己のアイデンティティを再定義することが必要とされる。彼の場合は、自伝を執筆する、すなわち自分の半生を「物語」にするにあたって、さらなる再定義によって自己成型したことになる。英語に堪能な元黒人奴隷「グスタヴス・ヴァッサ」から、イギリス人であることを選択した奴隷貿易廃止論者の黒人作家「オラウダ・エクイアー

ノ」として。そして、出版後の彼はイギリスの各地だけでなく、アイルランドにまで講演旅行をした。その様子は、映画『アメイジング・グレイス』のなかでも、エクイアーノが読者にサインしているカットとして挿入されている。オランダ語訳やドイツ語訳も相次いで出版された。結果的に、エクイアーノは18世紀で最も裕福な黒人になる。要するに、彼は奴隷貿易廃止運動における「唯一の黒人スター」になった、というわけである。

1789年3月に自伝が出版される頃までにエクイアーノは、いくつかの新聞・雑誌への投稿を通じてすでに活発な奴隷貿易廃止運動家として知られており、奴隷貿易をめぐる「出版戦争」(Carretta 257)の渦中にいた。ただし、そこでは彼は「グスタヴス・ヴァッサ」という、かつて彼を所有していた主人に付けられた名前を使用していた。たとえば、1788年1月28日の『パブリック・アドヴァタイザー』に掲載されたそのような投書のひとつは、奴隷貿易擁護論者ジェームズ・トービンへの公開書簡である。エクイアーノはその手紙のなかで、トービンのレイシズムに対して、聖書の言説を喚起して自分の「道徳的優位性」(Carretta 257)を主張している。この手紙の末尾に彼は、「グスタヴス・ヴァッサ」という名前と並べて、当時のアフリカの黒人の総称としての「エチオピア人」、さらに「元アフリカ移住計画の委員」という肩書きで署名している(*The Interesting Narrative* 332)。

「アフリカ移住計画」とは、国内にいる貧しい黒人をシエラレオネへ移住させようと、1787年にイギリス政府が計画したもので、彼はその委員会の唯一の黒人メンバーでもあった。アメリカ独立以後、大量にイギリス本土にやって来て貧困に苦しむ(その多くが元奴隷の)黒人たちが社会問題になっていたことが、この計画の背景にはある。そして、この状況に心を痛めた裕福なアングリカンとクエーカーのビジネスマンによるチャリティ組織、貧困黒人救済委員会(*The Committee for the Relief of the Black Poor*)による活動の延長線上に、シエラレオネ移住計画は考案され

た。しかし、その委員会に唯一の黒人として参加したエクイアーノは、計画実行責任者ジョゼフ・アーウィンとのいざこざのために、計画が実現する直前に委員を辞任させられた。計画自体はその後、実行に移され、アフリカ人の移民を乗せた船は 1787 年 5 月にシエラレオネに到着した。しかし、そのころ季節はちょうど雨季をむかえていたため、農地を耕作することもできず悲惨な結果となった。『興味深い物語』においても、ほとんど末尾に近いところでこの移住計画について語られており、彼はそこで、委員を辞任させられたことに憤りを感じながらも、また、移住が「不運な」結果に終わったにもかかわらず、計画自体は「人道的な」ものだ結論づけている (229)。

このシエラレオネ移住計画の挫折は、エクイアーノにとって大きな意味を持っていた。この計画への関わりが、彼を「作家」にしたとも考えられるからである。この委員辞任に対する憤慨から新聞に投書することによって、自伝出版時点での彼の政治的なレトリカル・ポジションが成立する。すなわち、人道的な計画に賛同・参加することによってイギリス政府の側に立ちながらも、完全にそこに属することのできない存在として、また、「臣民」でありながらもイギリスの内部で異議を唱える「異人」の「アフリカ人」の「代表」としての「作家」の誕生である。『興味深い物語』には、このようなイギリス「臣民」の一人として、王妃に慈悲を乞う 1788 年 3 月 21 日付けの手紙も全文引用されている。そのなかで彼は「グスタヴス・ヴァッサ、虐げられたエチオピア人」という署名の下、王妃として夫である国王に働きかけて、奴隷貿易廃止につながるような影響を与えてくれること、そして、その王妃の「慈悲深い影響力」によって、「哀れなアフリカ人」の「悲惨な現状に終止符が打たれること」を願っている (231-32)。

自伝出版の時点で、彼はこのような状況にあった。そこで彼は初めて、アフリカ名「オラウダ・エクイアーノ」を名乗って自伝を出版する。こ

の名前が、彼を「グスタヴス・ヴァッサ」として知っていた人々にとっても、ある程度の異化作用を発揮したであろうことは容易に想像できる。それゆえに、「オラウダ・エクイアーノ」は、現実の生身の人間としてではなく、奴隷貿易廃止論のなかに言説として存在するにすぎない。また、それゆえに彼の生涯の物語は、彼にそのようなレトリカルな発話を可能にしたリテラシー獲得の物語としても読むことができる。

3. 「黒いキリスト教徒」－教化の過程と英国化

『興味深い物語』第4章の冒頭、イングランドの地を初めて踏んで「3年か4年」が経過した頃、自分の置かれた境遇が「幸せだと感じ始めた」と、エクイアーノは回想している。その間も彼は、当時の主人でイギリス海軍中尉だったマイケル・ヘンリー・パスカルとともに多くの時間を海の上で過ごしていた。最初は何もかもが新しく「恐怖」を感じたのが、馴致されて「見慣れたもの」になる。それによって、彼は自分が「ほとんどイングランド人」のようだと実感し、「いまや英語をかなり上手に話せるようになっていて、言われたことはすべて完璧に理解できた」と述べている(77)。そして、次のように、この英語習得は、「優位なもの」としてイングランドの文化を彼に受け入れさせる。

私はもはや彼らを幽霊 (spirits) とは考えなかった。むしろ私たちよりも優れた人間と見なすようになった。それゆえに私は、彼らのようになりたいと、より強く思った。私は、彼らの精神 (spirit) を吸収し、彼らの立ち居振る舞いを模倣した。私は、それゆえにまた、あらゆる機会を利用して向上 (improvement) するように努めた。そして、何か新しいものを見たら、大切に記憶するようにした。

(78)

ここで、“spirit(s)”という語の意味のシフトに注意すべきだろう。(恐ろしい)「幽霊」から(模倣すべき)「精神」への格上げが、被植民者が教化される過程を物語っている。支配者を模倣する被支配者という、植民地主義における「模倣」の問題である。また、18世紀の進歩志向のキーワード“improve”という語は、このパッセージ以外でも繰り返し使われ、彼の教化にともなった英国化を指して使われている。

このエクイアーノの英国化は、英語のリテラシー獲得とキリスト教徒になることによって、並行して行われた。上記の引用の直後、彼が洗礼を受けたことが語られる。この1759年の出来事に際して、彼は牧師から「インディアンへのガイド」(a guide to the Indians)という本を贈られた(78)。『興味深い物語』の後の記述によると、この本は、聖書と並んでエクイアーノの「最も好きな本」とされている(119)。この本は、たとえばトマス・ウィルソン『インディアン教化のためのエッセイ』(1740年)に代表される、異教徒のためのキリスト教マニュアルである。³ また、船の上も、彼にとっては学びの場であった。彼はアテナという船の上では、特にダニエル・クインという40才くらいの男から教育を受けた。この男はよい教育を受けていたので、エクイアーノは彼から聖書で分からない箇所を解説される。そうして学んだキリスト教の「律法や戒律」が自分の知っているアフリカでのものと共通点多くて驚いた、とも述べているが、まるで自分の「父親」のような、と喩えられる彼との関係のなかでエクイアーノは、ともかくも敬虔な自称「黒いキリスト教徒」(the black Christian)となる(92)。

その後、エクイアーノは、北米で貿易業を営むロバート・キングというクエーカー教徒に買われた。もともと奴隷制度の廃止を主張していたクエーカー教徒に引き取られたことが、彼にとって幸運に作用し、ついに彼は働いて貯めたお金で自由を手に入れる。『興味深い物語』には、エクイアーノがこのとき手に入れた解放証明書(manumission)が全文引用され

ていて、再度の奴隷化から自分の身を守るためにも、おそらく彼は肌身離さずこれを持っていたのだと思われる。しかし、宗教的自伝 (spiritual autobiography) としての『興味深い物語』は、この奴隷状態から解放された時点から始まると言ってもよい。エクイアーノは奴隷状態から解放されて「自由」を手に入れた。それでも、「魂の救済」を得るまで物語は終わらない、のである。ここに、精神的危機がもたらした宗教的なレトリカル・ポジションが成立する。

1774年のある日、4時間におよぶメソジストの愛餐 (a love feast) と呼ばれる集会に参加した翌日、エクイアーノは、おそらくそこで知り合ったと思われる夫婦の家を訪問する。そして、彼はその夫妻と「魂の問題」について「時間が来て帰らなければならなくなるまで」語り合う。帰りに、彼は「インディアンの改宗」(The Conversion of an Indian) という本を渡される (185)。これは、1774年初版が出たロレンス・ハーロウ『インディアンの改宗、友人への手紙』だと思われる。⁴ かつて洗礼のときに贈られたものと同じようなマニュアルを、ここでも渡されたということは重要なポイントだろう。つまり、この段階においても、どれほど敬虔なキリスト教徒として努力しようとも、他の白人の目から見たら彼は紛れもなく「黒人」であり、改宗が必要な「異教徒」なのだ。

『インディアンの改宗』の場合と同じく、こうしたメソジストとの関わりの後、エクイアーノに啓示がもたらされる。それは、希望 (The Hope) という名前の船に乗ってスペインのカディスに向かう途中の 1774年 10月 6日の夜、聖書の『使徒言行録』4章 12節を読んでいるときのことだった。その瞬間を、神が「天からの光」をともなって彼の魂を訪れ、「聖書の封印が解かれた」と、彼は次のように記述する。

[...] このように仰天していたとき、主が、天からのまばゆい光をともなって私の魂に喜んでお入りになった。その瞬間、まるで覆

っていた布が取り除かれたかのように、暗いところに日が差した
（『イザヤ書』25: 7）。カルヴァリ山の十字架の上で血を流している、
はりつけにされた救世主の姿を、信じる者の目で私ははっきりと見
た。聖書の封印が解かれ、私は自分が法の下で有罪を宣告された罪
人だと思われた。それは、私の良心に強力に迫ってきた。そして、
「掟が登場したとき、罪が生き返って、私は死にました」[『ローマ
信徒への手紙』3: 9]。[・・・] 自分の貧しく哀れな境遇を思ったと
き、私は涙し、至上の物惜しみない恩寵に対して、自分がどれほど
大きな負い目を持つ者かを思った。いまやエチオピア人も、罪人に
とって唯一の引受人、イエス・キリストによって救われることを願
っており[『使徒言行録』8: 26-39]、また、救済のためには、他の
いかなるものにも頼りはしなかった。(190)

宗教的自伝としての『興味深い物語』は「幸いなあやまち」(fortunate fall)
の物語で、エクイアーノの場合は奴隷状態がそれにあたる。そして、この
「罪人」であることの認識と、そこからの救済ということから、彼は「エ
チオピア人」も「イエス・キリストによって救われる」という感覚を得る
に至る。

ここで、彼の啓示が、聖書に代表される本からもたらされ、その「封印
が解かれる」こととして描写されていることに注目すると、この自伝をこ
こまで読んできた読者は、これを作品の前半にあった印象的な記述と結び
つけることができる。1757年、彼はそのとき、当時の主人であったパス
カルと幼い頃の白人の親友ディックが本を読んでいるのを見て、「二人が
していると思っていたように、自分も本に話しかけてみたいという大きな
好奇心を感じた」(68)。そこで自分も話しかけてみるが、本は答えてくれ
ない、と述べている。これは、ヘンリー・ゲイツ・ジュニアが分析した、
アフリカ系作家に頻繁に見られる“Talking book”のモチーフの典型的

な例である。「万物がどのように始まったのか知るために」(68) とあることから、その「本」が聖書であったことは間違いない。この聖書との出会いから、先に見た啓示を受けるまでの物語は、エクイアーノが宗教的なリテラシーを獲得するまでの物語となるのである。

実際に、彼が啓示を受けた箇所の記述は、聖書の『使徒言行録』だけでなく、『イザヤ書』、『ローマの信徒への手紙』、『ヨハネによる福音書』などへの一連の言及や引用をともなって言説化されている。なかでも、『使徒言行録』8章26-39節に基づく「イエス・キリストによって救われるエチオピア人」、すなわち、聖書を読んでいたが、何が書いてあるのか理解できないエチオピア人の宦官が、使徒フィリポの導きによってそれを理解し、洗礼(バプティスマ)を受ける、というエピソードは、エクイアーノが啓示を受けるに至るまでの教化の過程のミニチュアである。ワールズ・クラシックス版の聖書の注釈によると、この使徒フィリポとエチオピア人の宦官の物語は、聖書の導かれた読書の代表的な事例で、テキストと読者と釈義者が、特定の読みを行うために、所定の状況でひとつに集まることを示唆している(Carroll and Prickett 414-15)。しかも『興味深い物語』の文脈では、この導きは「エチオピア人」に対して行われる。エチオピアという、「尊ぶべきアフリカの国家についての聖書における呼び名」、「聖書の預言が、すべてのアフリカの人々を賛美することを約束することを簡潔に言うのに使われるようになった」(Callahan 139) この呼び名を再び喚起することによって、総体としての黒人に対する、白人の適切な導きによる改宗のモデルを提示しているのである。

このように、「グスタヴス・ヴァッサ」という元奴隷は、ふたつのレトリカル・ポジション、すなわち、アフリカ名を使う奴隷貿易廃止論者の政治的な位置づけと、啓示を語るまでに教化された宗教的な位置づけからの発話によって再定義される。そして、このふたつが重なるところに、「オラウダ・エクイアーノ」という黒人作家が成型される。そこで、「アフ

リカを代表すること」のメッセージは、『興味深い物語』のなかで、総体としての<アフリカ>を喚起しながら、逆説的に「黒いキリスト教徒」によって<英国化>されて実現するのである。

注

- 1 “Equiano” のカタカナ表記は、『リーダーズ・プラス』（研究社）に従って、「エクイアーノ」とする。
- 2 ちなみに、エクイアーノの生涯を描いた 1995 年制作のテレビ用のドキュメンタリー映像として、*A Son of Africa: The Slave Narrative of Olaudah Equiano* (Aimimage Productions for BBC Education, 28 minutes) がある。エクイアーノの役は Hakeem Kae-Kazim が演じている。詳細については Wallace 129-39 を参照。
- 3 このトマス・ウィルソン『エッセイ』の本文は、非キリスト教徒の「インディアン」と「宣教師」(Missionary) との対話で構成されている。序文にあたる部分を読むと、その対象には黒人も含まれていることが分かる。ただし、本文を構成する対話の内容自体は、広く非キリスト教徒を対象にしていると考えてもよいもので、序文以外で特にインディアンや黒人を想定した話題は取り上げられていない。それゆえに、そこで宣教師の対話の相手がインディアンである必要はまったくない。インディアン自身のセリフを見ても、自分がインディアンであることを示唆するものはないし、話される英語も普通の英語である。
- 4 参照することのできた第 3 版によると、この作品は、末尾に署名がある「ロレンス・ハーロウ」という名前の人物が書いた長い手紙からなっている。彼は、ニューヨークからロンドンにやってきた異教徒のネイティヴ・アメリカンで、キリスト教の神を求めるうちに、(おそらくは)メソジストの集会に出席して、彼らと関わるうちに真の神の意味を知る、

という経緯がそこでは語られる。

引用文献

- Carroll, Robert, and Stephen Prickett, eds. *The Bible: Authorized King James Version*. World's Classics. Oxford: Oxford UP, 1997.
- Brown, Christopher Leslie. *Moral Capital: Foundations of British Abolitionism*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 2006.
- Callahan, Allen Dwight. *The Talking Book: African Americans and the Bible*. New Haven: Yale UP, 2006.
- Carretta, Vincent. *Equiano, the African: Biography of a Self-Made Man*. Athens: U of Georgia P, 2005.
- Equiano, Olaudah. *The Interesting Narrative and Other Writings*. Ed. Vincent Carretta. London: Penguin, 2003.
- Fryer, Peter. *Staying Power: The History of Black People in Britain*. London: Pluto, 1984.
- Gates, Henry Louis, Jr. *The Signifying Monkey: A Theory of African-American Literary Criticism*. New York: Oxford UP, 1988.
- Harlow, Laurence. *The Conversion of an Indian, in a Letter to a Friend*. [London?], 1778.
- Kane, Katharine. "Looking North." *fRoots* 293 (Nov. 2007): 35-37.
- Moss, Stephen. "I'm Bringing a Message." *Guardian*, 21 March 2007, G2: 28-29.
- Parker, John, and Richard Rathbone. *African History: A Very Short Introduction*. Oxford: Oxford UP, 2007.
- Wallace, Elizabeth Kowaleski. *The British Slave Trade and Public Memory*. New York: Columbia UP, 2006.

Wilson, Thomas. *An Essay towards an Instruction for the Indians*.
London, 1740.

付記：本稿は、東北英文学会第 62 回大会シンポジウム「18 世紀再考 - 「異端なるもの」の行方」（2007 年 11 月 18 日、山形大学）における口頭発表に加筆・修正を加えたものである。また、平成 19 年度科学研究費補助金（萌芽研究）「18 世紀アフリカ系イギリス作家と感受性の文学」の助成を受けた。